

新時代を切り拓く社会科学習の在り方について

姫路市立城陽小学校
主幹教諭 小川 真也

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、人工知能の進化、SDGsの推進などにより、現代を生きる子ども達の将来は、予測困難な時代になると言われている。平成29年告示の小学校学習指導要領は、そうした社会の変化やその先の社会の在り方を見通しながら、その時代に社会人として活躍できる人材に必要な力を育むことを目的に改訂された。そのためには、児童の学習の中に「持続可能な社会の実現」について現代の社会が抱える諸課題について主体的に追究し続け、自分にできることを思考・判断・表現する場面を設定することが重要であると考え。そこで、社会科学習において「児童が主体的に学習に取り組むことができる魅力的な教材・資料の開発」「児童が自分を社会につなぐことができる対話的な学習展開」を軸に研究を行った。そうすることで、持続可能な社会に向けて生きて働く力を子どもたちに身につけさせることができると考え、実践を進めている。

この稿では、社会科学習における「魅力的な教材・資料の開発」及び「多様な人材との対話を重視した学び」について実践したことを、紹介したい。

(2) 児童が主体的に学習に取り組むことができる魅力的な教材・資料の開発

社会科学習において、児童が主体的に学習に取り組むためには対象とする教材(社会的事象)が、児童にとって身近に感じられるものであることが重要である。社会的事象に対して児童が感じる、「どのようにして?」、「なぜだろう?」といった小さな疑問を連続して取り上げていくことで、問題解決的な学習を展開することができる。そのような疑問から社会の仕組みについて学習し、自分が社会の一員であることを認識していくことを目指していく。これらのプロセスにおいて、学習対象が身近であることは児童にとって無理なく学習を進めて行くことに寄与するものである。

魅力ある資料と体験活動 ～3年社会科「わたしたちの市のうつりかわり」～

生活科から社会科に発展する3年生は、児童にとって大きな転換期になる。生活科における家庭や学校、身近な地域といった学習から、社会科では校区をはじめ姫路市全体へと学習対象が広がる。さらに、兵庫県、日本全体と学年が上がるごとに学習対象が広がっていく社会科学習においては、3年生において確実に社会的事象の見方・考え方の基礎を身につけておくことが重要である。そこで、姫路市全体の移り変わりを学習する前に、校区の移り変わりについての学習を組み込んだ単元を開発した。

過去数十年間における校区の様子や人々の生活の変遷について、児童が学習しやすいように、写真資料や体験的な活動を中心とした単元を構成した。校内に保存してある資料だけでは不十分であったため、姫路市広報課や兵庫県立歴史博物

館から多くの写真資料を提供していただいた。また、校区在住のスクールヘルパーの方を招いて、当時の生活の様子について児童と意見交流を行ったり、七輪での火起こしを教えていただいたりと体験的な活動の充実を図った。

日頃から見慣れている景色とは大きく異なる昔の写真について話し合ったり、スクールヘルパーとしていつも見守ってくれている方をゲストティーチャーとして招聘し交流したりしたことで、児童が高い意欲をもったまま学習を進めることができた。



図1 罹災した城陽小学校講堂
(兵庫県立歴史博物館 所蔵)



図2 写真を時代順に並び替える
グループ活動



図3 地域の高齢者との対話



図4 七輪体験の実施

校外学習に代わる視聴覚教材の作成 ～施設や工場の見学動画の製作～

令和2年度は、感染症拡大防止対策の一環で、校外学習のほとんどが実施できない状況であった。学習する対象を現地に赴いて見学調査することは、社会科学習において極めて重要な活動であると言える。そこで、姫路市役所をはじめとする行政施設や民間企業に協力を依頼して、ごみ処理場、浄水場、かまぼこ工場などの動画を作成し、市内の学習サイトにアップした。

各動画において、過去の見学・説明資料をもとに内容を構成し、施設の概要や製品の製造過程を中心とする一方で、担当者への質疑応答をイメージしたインタビュー映像を組み込むことで、児童が疑問に思ったことを解決できる資料としての活用をねらった。学習サイトは、児童に一人一台導入された Chromebook や、家庭で使用している端末機からもログインすれば視聴できるため、教室での一斉授業のみならず児童の一人学習においても効果を発揮することができた。



図5 かまぼこ工場見学動画
(協力 ヤマサ蒲鉾株式会社)



図6 浄水場職員へのインタビュー

(3) 児童が自分を社会につなぐことができる対話的な学習展開

社会科の学習において、社会的事象を自分事としてとらえるための学習活動のひとつが、社会に対して児童が選択・判断する場面であると考えられる。単元を通じて獲得してきた知識や概念を用いて、今の自分にできることや未来の社会について考えることは、自らを地域や社会に生きる一員として認識することにつながる。そして、その学習場面において、社会で実際に諸課題に対してつながっている人物との対話的な学習活動を設定することで、現在及び未来の社会のあり方についてより身近に感じながら広く考えることができる。

自分たちにできること ～4年社会科「ごみのゆくえ」～

前述のごみ処理場の動画作成において連携した、姫路市役所リサイクル推進課の担当者をゲストティーチャーとして招聘した。児童がこれまでに学習してきたごみ処理の取り組みから、「ごみを減らすために自分たちにできることは、ないのだろうか?」という学習問題を設定し、それに対して個人やグループで考えたアイデアについて担当者と対話する活動を取り入れた。担当者からの、「小学生だからこそできることがある。」という声掛けから始まり、「合言葉はもったいない。」という市内でのごみ減量についてのスローガンをもとに、行政における取り組みを紹介していただきながら、児童が考えたアイデアについて対話を行った。地域のテレビ局や新聞社も取材する中、児童と市の担当者がこれからの姫路市のごみ減量について話し合う活動は、校内のみならず市内に広く啓発することができた。



図7 市の担当者との対話活動



図8 朝日新聞(2020年7月30日)

歴史学習から未来を考える

～ 6年社会科「国力の充実を目指す日本と国際社会」～

歴史学習において、「自分たちにできることを選択・判断する」活動は設定することが難しい。そこで、その時代の中心的な登場人物に焦点を当てて学習を進め、現在、未来へと児童の意識を繋げる単元を構成した。ここでは、伊藤博文に焦点を当て明治維新とそれ以後の日本の国づくりについての変遷を学習させ、単元の終末に、伊藤博文に対して手紙を書く活動を設定した。手紙の内容は、「伊藤博文の当時の取り組み」「現在の日本とつながりのある点」「これからの日本のあるべき姿」について児童なりの意見を述べた。児童にとって遠い昔の歴史人物を身近に感じ、その人物との対話を設定することで日本が歩んできた歴史を学び今後に生かしていこうとする意識をもたせることができた。

2 取組の成果

児童にとって身近で魅力ある資料と体験活動を単元内に効果的に組み込むことで、児童が主体的に追究活動に取り組むことができた。外部の人材との対話的な学習は、講師からの一方的で講話的な活動とは異なり、児童が学習してきた内容やその過程で生じた疑問について専門家と意見を交流し合うことをねらった。その結果、地域や日本の未来について考える活動を通して、理解を深めるだけでなく「もっと知りたい。」「知ったことを誰かに伝えたい。」といったさらなる学習意欲へとつなげることができた。

3 課題及び今後の取組の方向

地域素材を教材として活用したり、地方行政や民間企業と連携して学習を展開したりすることで、児童にとって充実した質の高い社会科学習を実践することができた。本実践において作成した資料、指導計画、評価計画などはすべて市内の小学校と共有しており、どの小学校においても活用することができる。しかしながら、周知が十分ではなくすべての小学校で同様の実践が進められているわけではなく、また、校区の実態に合わせて改善例を示していく必要も考えられる。

今後は、新しい時代に求められている社会科学習について、市内に限らず県内の小学校並びに中学校、さらには高等学校までを見通して実践研究を進めていきたい。そのためにも、様々な校種の先生方や実践家、研究者の方々と交流しながら研鑽していきたい。

参考文献

- 澤井陽介 小学校新学習指導要領 ポイント総整理 社会 東洋館出版社 2017
- 澤井陽介 社会科の授業デザイン 東洋館出版社 2015
- 安野 功 授業実践ナビ 文溪堂 2010
- 安野 功 新しい社会科の授業 日本標準 2017
- 北 俊夫 なぜ子どもに社会科を学ばせるのか 文溪堂 2012